

## 卷 頭 の 辭

土木は人類の福祉増進の爲に大自然を相手とする戦の工學である。然るにこの大自然は實に種々雑多な風貌を備へ、各地必ずしも同一ではない。即ち日本には日本の、滿洲には滿洲の自然がある。従つて我等の土木工學もその土地に深く根を下したものでなければならぬ。絶対に日本の、米國の、或は獨逸の模倣土木であつてはならない。新國家滿洲の土木に携はる吾々は新しい滿洲の土木工學を樹立すべき重大な責任を有するのである。殊に滿洲國の特異性と現在時局は此の樹立が一日も早からんことを要求する。

由來日本人は維新以來文明急追の結果か、書物に頼り過ぎる傾向がある——筆者の偏見ならば幸である——又既存方程式に依つてのみ結果を見出さんとする、惡癖を有するのでは無いか。書物は異つた土地のしかも過去の經驗を記録せるに過ぎず、理論は總ての現象を解決し得ない。事實は常に先に起り、理論は之に従つて形態づけられるものだ。勿論書物は以て他山の石とすべく又既知理論は充分活用すべきで毫も輕んせよと言ふのではない。少くとも新工學を樹立する爲には常に一步前進し新しい事實を把握する必要がある、新事實の解決は實驗に依るを最も捷徑とする。然るに實驗設備の如きは時間の不足と費用の節約から忘却され勝ちではなかつたか？かくては模型ならぬ實物を以て實驗する結果となり多大なる時間と莫大なる經費とを損失し「不可抗力」或は「不慮の災」なる語を使用せざるを得なくなるのではなからうか。

本會々員既に1,000名を突破し、大河川、大堰堤及大道路等々計畫實施されつゝある時に際し、完備せる中央土木試験所の一日も早く實現する様當局の一大英斷を希望すると共に、現場に御活躍せられる會員諸兄にも出事得る限りの實驗設備を整へられ、その使用材料に、工法に、又工事結果に就き眞摯なる研究によつて斯界に貢獻せられんことを熱望する。